令和7年度 ボランティア自主企画事業
「わくわくみっけ!あつまれわかさのもり」 事業報告書
R7.11.2（土） 日帰り

ボランティア活動は、青少年の自立や健全育成、社会参画を促進するうえで重要な役割を果たしており、当機構では各施設のボランティア・コーディネーターがボランティアに対し継続的な教育的支援を実施している。

本事業は、その一環として、各施設のボランティアが自主企画事業を実施するにあたり、ボランティア・コーディネーターがその企画立案時からの指導・助言、事業運営における安全管理等に携わる、ボランティアが学びと活動を循環させながら成長していくことを目的として実施した。

◆ 対象

国立若狭湾青少年自然の家で活動するボランティア 自主企画委員 大学生4名

当日の班付きボランティア 7名(大学生6名、高等学校専攻科生1名)

◆ 企画の流れ

① 企画ボランティアの募集

昨年度のボランティア自主企画事業に参加したメンバーに声掛けを行い、自主企画委員(以下：委員)を希望する大学生を選出した。昨年度は委員が4名ともプログラムを担当したことで全体を統括するボランティアが不在となってしまったため、今回は2名を「統括」として選出し、そこから「プログラム担当」として2名選出した。委員の人数は昨年同様の4名とした。

② 企画

6月 10 日（火）にキックオフミーティングを実施。「統括」の2名とボランティアコーディネーターが、事業の柱となる今回の目的・目標、対象者、日程等、の意見交流を行った。大きく方向性が決まった段階で、「プログラム担当」の 2 名を委員として招き入れ、統括の 2 名がプログラム担当と連携を取りながら企画の計画を進めた。

③ 実地踏査

8 月に実地踏査 1 回目を行った。委員 4 名が集まり、当日の流れを打合せした後、活動場所の下見や活動の試行を行った。2 回目の実地踏査は委員に加え、班付きボラの5名を含めた9名が若狭湾に集まった。プログラム内容がある程度決まっていたため、事業当日の活動場所や動線の確認を行った。また、参加者の安全管理や班付きボラへのサポートについても打合せを行い、当日の運営がスムーズに進行するように準備を進めた。

◆　ボランティア自主企画事業の実施

①　事業の名称

わくわくみっけ!あつまれわかさのもり

②　事業の目的

たくさんの体験活動を通して非認知能力を高める。

③　事業の目標

・子どもの小さな「できた!」を積み重ねる。

・友だちと協力してやり遂げる達成感を味わう。

④　参加実績

幼児（年長児）　18名（男児９名　女児９名）

［小浜市6名、おおい町3名、敦賀市7名、美浜市1名、舞鶴市1名］

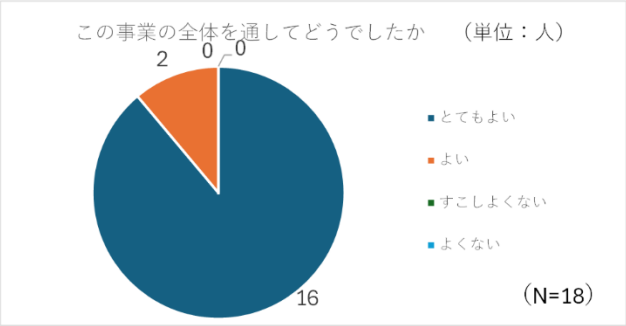
⑤　日程

令和7年11月2日（日）　日帰り

9：00　受付 9：30　はじまりの会 10：00　森探検 （山の中をグループで探検しながら、身体をいっぱい使い自然を楽しむ） 12：00　昼食 （森の中の好きな場所に敷物を敷き、持参したお弁当を食べる） 13：00　たき火とクラフト （落ち葉を集めて焼き芋を実際に焼き、木の実クラフトを行う） 15：00　おしまいの会 15：30　解散（予定）

⑥　事業の成果と参加者の聞き取り

◎「全体の満足度」に対して、18名中 16名が「とてもよい」と回答した。



とてもよい　…16名
よい　…2名
すこしよくない…0名
よくない　…0名

（参加者への聞き取りより）

・最初は帰りたいと泣いていたが、今になったら帰りたくない。

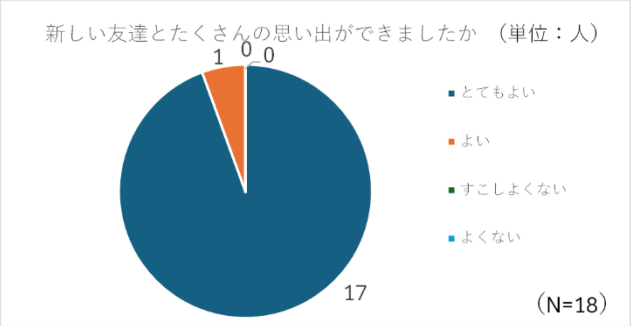
・初めてだったけど楽しかった。一生ここにいたい。

・お弁当、クラフトづくり、焼き芋が楽しかった。

・山に触れ合うことができた。

・葉っぱ集めが楽しかった。

◎「新しい友達とたくさんの思い出ができましたか」の設問に対して、18 名中 17 名が「とてもよい」と回答した。



とてもよい　…17 名
よい　… 1 名
すこしよくない… 0 名
よくない　… 0 名

（参加者への聞き取りより）

・山に登るのは怖かったけど登れた。どんぐりをいっぱい集めて洗うと濡れたけど、みんなで楽しかった。焼き芋もおいしかった。味は 3000 点。

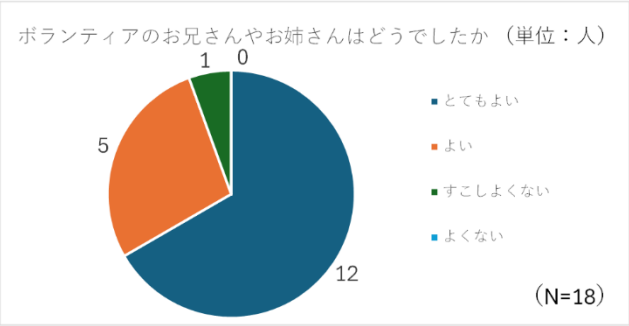
・山登り、焼き芋、クラフト

・焼き芋を食べたこと。

・友だちの名前を覚えることができた。

・たくさん友だちができた。

◎「ボランティアのお兄さんやお姉さんはどうでしたか」の設問に対して、18 名中 12 名が「とてもよい」と回答した



とてもよい　…12 名
よい　… 5 名
すこしよくない… 1 名
よくない　… 0 名

（参加者への聞き取りより）

・山に登るときに助けてくれた。

・山でブランコもできて楽しかった。

・お兄さんお姉さんが優しくて楽しい気持ちになった。

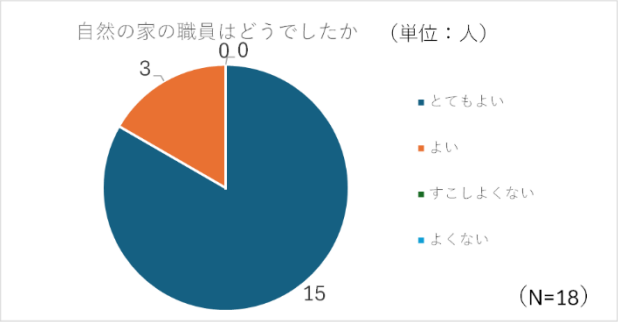
（優しかったの意見：多数）

・分かりやすかった。

・面白かった。

●1 日しかなくて仲良くなりきれなかった。

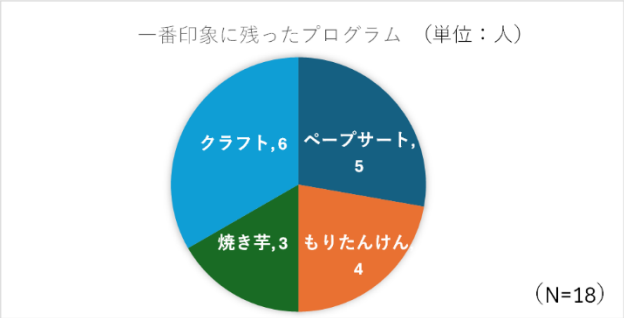
◎「自然の家の職員はどうでしたか」の設問に対して、18 名中 16 名が「とてもよい」と回答した。



とてもよい　…16 名
よい　…2 名
すこしよくない…0 名
よくない　…0 名

（参加者への聞き取りより）
・全員優しかったから好き。
・一緒にご飯を食べてくれたから（すき）。
・話しかけてくれた。
・楽しかった。

◎この事業で一番印象に残ったプログラム



（参加者への聞き取りより）

★ペープサート（物語）
・面白かった。
・いい話だった。
・楽しかった。

★もりたんけん
・どんぐりをいっぱい集めた。
・アブラギリを初めて触った。
・葉っぱにも来ることができた。

★焼き芋
・味を聞かれてうれしい気持ちになった。
・葉っぱを集めて、イモをくるんだ（新聞紙とアルミホイルに）。
・温かくておいしかった。

★クラフトづくり
・みんなに「喜んでもらえそう」と褒められた。
・楽しかった。もう1日やりたい。
・どんぐりを貼り付けた。
・持ち手を工夫した。
・かわいいのがつくれたから

⑦　委員より

・森の中で自由に遊べることが珍しくなっているので、子どもたちが全力で楽しんでいる姿が見られてよかった。

・今回のペープサートや地図、宝箱、挑戦状など、子どもたちが見てわかる視覚支援を準備したことで、子どもたち自身が自然に活動に向かえるような導入につながった。

・余裕を持って準備ができるよう計画的に進めることが大事だと思った。

・経験の浅いボラに対して、無茶振りしている部分や、活動中にサポートでききれなかった部分があり申し訳ない気持ちだった。

・対象が幼児だからこそトイレや食事が時間かかってしまったりしたので、もう少し考えておくべきだったと感じた。

・これまでの事業と参加者の年齢が違うと受け取り方や反応が大きく違った。だからこそ、大人は行動や発言は気をつけなければならないと感じた。

・細かいところまでプログラムの共有ができておらず、「もしもの場合」が想定できていなかった。事前準備や実地踏査を通して「もしも」に気づけるようにしていきたい。

・今回は一部の当日ボラも役割をもち、得意なところで力を発揮してもらった。このように当日ボラを巻き込んでそれぞれの得意を生かしながら実施できるとさらによい自主企画になると思う。

・企画委員の4人の中で、上下の関係性が生まれ相談や意見を言いづらかったので、4人対等な立場で運営ができるとやりやすい。

⑧　班付きボランティアより

・伝えたい言葉のニュアンスや伝え方を工夫するだけで伝えたいことが的確に伝えられることに気付けた。

・企画委員が本気で取り組んでいる姿を見たからこそ、自分も本気で取り組まないといけないと改めて感じた。

・何か足りていないところなどをみんなが言い合えて、良い企画に近づいているのが実感できたところがよかった。

・事前の打ち合わせで、事業全体の方針をみんなで共有できたため動きやすかった。

・どうしても動きが多い子に目が行ってしまい、おとなしめの子の良いところを見つけるのも横について話すのも難しかった。

・幼児（年長児）はできることが多いため、干渉しすぎないつもりだが、それでも手を出しすぎたかと反省した場面は多かった。子どもの主体性や自分でする経験を奪ってしまったのかもしれないと感じた。

・発想や想像力が豊かで、固定概念にとらわれない大人では思いつかないようなアイデアが見られた。

・当日までに zoom などがあれば班付きボラも流れや役割がイメージしやすく、詳細を詰

めるべきところも早めに分かり企画者の負担が減ったかもしれない。

⑨　事業の成果

・初めに決めた目的・目標を意識できるように、プログラムや活動の方向性を考える際に目的・目標を随時確認しながら検討することができた。

・ペープサートでの物語を軸にして事業を進行し、子どもが自分自身で次の活動内容を理解し動くことができる支援の一つとなった。幼児におけるペープサートの効果をボランティアが実際に感じ「子どもにとってよかったもの」と感じられたことはよかった。

・ボランティアが幼児（年長児）の事業経験があまりないため、「発達段階」と目標の「非認知能力」について共有する時間を確保し理解を深めることができた。そのため、参加者への関わり方が明確になり当日自信をもって言葉かけができたボランティアが多く、次のボランティアの時にも生かせる視点である。と感じているボランティアも多かった。

・参加者の目の高さに合わせ、言葉に耳を傾けたり、やろうとしていることに対して肯定的にとらえたりと共感の心をもって参加者に接することができた。また、「非認知能力」というキーワードがあったことで、子どもがすることの先回りはせず、自分で考えてすること、工夫しながら試行錯誤すること、を丁寧に支援することができていた。

・ボランティアの振り返りから、企画委員への尊敬の気持ちや子どもから学んだことを丁寧にまとめており、事業に真剣に取り組んできた姿勢が伝わってきた。特に、普段接することの少ない年長児との関わりは緊張感を生み、そのことが支援方法を考え続ける姿勢につながったように感じる。

・幼児（年長児）の宿泊事業になると参加のハードルが上がることや、アレルギーの対応が多くなることが想定されたため、日帰り事業にすることとし、昼食はお弁当を持参してもらい、参加しやすい環境設定にした。

・解散時に参加者のよかったことや怪我や汚れなど特記事項を保護者に共有して、引き渡すことを事前にボランティアに伝えていた。一斉に帰る中で、一人一人のよかったことを子どもがいる前でボランティなりの言葉とよい表情で伝えることができていた。

・山に入るので仕方がないが、クマや蜂などへの対応が必要だった。クマについてはその日の朝に人の気配を出すために自然歩道を犬の吠える音出しながら車で走行し、蜂についてはハチジェットを担当職員が携行し羽音などに注意を払った。

・嶺南地域へのチラシ配布や児童館等の施設への広報を実施したが、福井新聞へプレスリリース後に一気に申し込みが増えた。

⑩　事業の課題

・キックオフミーティング際に、大まかに提出期限を決めて余裕をもって進むように計画をした。一週間前の実地踏査でようやく流れが確定し、事業前日まで作成物や共通確認に時間を要した。もっと綿密な計画と進捗状況に合わせた計画の修正をする必要がある。

・昨年度 4 名の企画委員で全員がプログラムをもったことで、全体把握まで余裕がなかった為、今年度は統括担当を設定し全体把握ができるように計画した。しかし、統括担当はプログラム外のペープサートや細案作りなどで手いっぱいで、プログラム担当任せになり負担が大きくなった。

・昨年度、一昨年度と企画委員をしていたメンバーが統括担当であったため、企画書の書き方や、誰に書くのか、なぜ書くのか等を伝えずに進めた。そのことで修正が多くなりかなりの時間を要した。自主企画に入るまでに、別の事業で一コマを担うなど提出書類（企画書、チラシ、他）を作成する経験ができるとよい。

・4 名の参加者で班を構成し、そこに班付きボランティアを 1 名配置する計画だったが、申込人数が少なかったことや活動の関係でペア班を作りたかった為、5 名で班を構成し、そこに 1 名の班付きボランティアを配置した。幼児（年長児）のため、自由な行動も見られ大変さはあったものの、急遽の対応などは班付き外のボランティアに任せながら全体としては対応できた。しかしながら、幼児（年長児）であれば 4 名 1 班で構成する方が気持ちの余裕が生まれる。

集合写真

⑪　活動写真

はじまりの会

アイスブレイク（自己紹介）

ペープサート

森探険

たからものさがし

落ち葉集め

焼き芋づくり

焼き芋づくり

クラフト作り

ふりかえり

おしまいの会